

小論文問題用紙



〔設問〕 次の文章を読んで、

- (A) 「サードプレイスは地域の中でゆるくつながる場として適している」について筆者がどのように述べているか、本文中の言葉を用いて百字以内でまとめ、
 (B) 関係人口における「風の人」の役割について、あなたの考えを五百字以内でまとめなさい。

サードプレイスとは、*1オルデンバーグが提唱した考え方です。その考え方は、家庭（第1の場）でも職場（第2の場）でもない第3の場所に注目しよう、ということとです。第3の場所とは、イギリスのパブやフランスのカフェのように、とびきり居心地が良く、まったりとした時間を過ごせる場所を意味しています。サードプレイスには、中立性、社会的平等性の担保、会話が中心に存在すること、利便性があること、常連の存在、目立たないこと、遊び心があること、という7つの特徴があるとされています。つまり、サードプレイスとは、人々が気軽に集まり交流できる、憩いのある楽しい場なのです。ただ、同時に多様で異質な人々が、自分の社会的立場を気にせず、交流できる場でもあります。実は、このような特徴があるからこそ、サードプレイスは地域の中でゆるくつながる場として適しているわけです。

片岡重紀子さんはその研究の中で、サードプレイスを3種類に区分しています。第1の型は、マイプレイス型です。マイプレイス型とは、スターバックスやドトールのようなカフェなどで、個人が時間を気にせず、ゆったりと過ごす場です。このような個人の憩いの場は、とりわけ都市の生活で疲弊しているときには貴重なものでしょう。第2の型は、社交交流型です。これは、まさにオルデンバーグの指摘したサードプレイスそのものであり、地元の居酒屋など、なじみの常連が社交の場として、賑やかに楽しむ場です。

ただ、今回、地域のサードプレイスとして注目したい第3の型は、目的交流型です。目的交流型とは、地域のNPO、こども食堂、コミュニティカフェなど、何らかの地域活動としての目的が存在し、自発的に人々が集まる場を意味します。これは、オルデンバーグの指摘した社交が中心のサードプレイスをさらに発展させた、進化形のサードプレイスではないでしょうか。

この分類の見取り図として、図1をご覧ください。

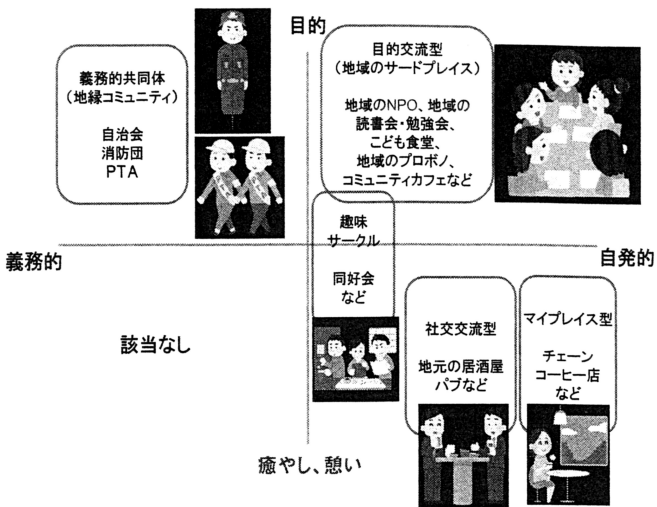


図1 地域のサードプレイスの分類

この図においては、「目的 VS 癒やし、憩い」という軸と「義務的 VS 自発的」という軸があります。「癒やし、憩い」で「自発的」という象限には、社交交流型とマイプレイス型が該当します。もともとサードプレイスには、人生の潤滑油という役割がありますから、この象限に該当するのは当然といえるでしょう。

一方、目的交流型（地域のサードプレイス）は、「目的」で「自発的」という象限に該当します。目的交流型には、地域で何らかの目的を達成したいという情熱を持った人が集まります。自発的であるため、もちろん楽しさもあるでしょうが、そこには、地域の何かを変えたい、良くしたいという目的があるのです。

ただ、目的交流型は、「目的」で「義務的」の象限に該当する義務的共同体（地縁コミュニティ）とは区分されます。たとえば、自治会や消防団のような地縁コミュニティは地域が機能していくには欠かせない重要な存在です。しかし、地縁コミュニティでは参加が必須であることが多いため、地域との関わり方がそれだけだと、少し息苦しいのではないでしょ

うか。地縁コミュニティにおける人間関係は濃密なものとなりやすいため、もう少し気軽な場が選択肢にあると人生がより豊かになると思えます。

そこで、目的交流型（地域のサードプレイス）が新しい選択肢になるわけです。地域のサードプレイスにおいて設定される目的は、地縁コミュニティと同様に地域にとって重要です。しかし同時に、地域のサードプレイスは自発的に参加するものであって、出入り自由なのです。このような気軽さが、地域とゆるくつながるためのポイントになってくるわけです。

また地域のサードプレイスでは、関わり方の3種類（居住地域、ふるさと、ファンの地域）のいずれについても、場として機能します。居住地域で、今まで地域に無関心だった人の参加の第一歩としての場になりやすいでしょう。ふるさとやファンの地域に対して「よそのもの」として関わりたいと思うときも、多様な人が出入り自由の場なので、すんなりと受け入れてもらえることができるでしょう。

地域のサードプレイスと同様に、ゆるくつながる考え方として、最近注目を集めている考え方が関係人口です。今までは、地域と人の関わりとして、定住人口、交流人口という用語が注目されてきました。地域については、人口減少による危機が叫ばれていますから、定住人口が注目されるのは当然のことでしょう。少しでも人口を増やしたいという観点から、U I J ターンはブームと呼べるほど、希望者が増えています。次に、交流人口ですが、すぐに思い浮かぶことは観光です。特徴あるイベントや、地域の特産品づくり、コト消費などをうまく絡ませると、一気に観光客増につながり、地域おこしの切り札になることも多いのです。

しかし、地域についての選択肢が定住人口、交流人口しかないと考ええると、関わり方が限定されてしまいます。定住・移住は素晴らしいことではありません。ただ、「定住・移住して、全身全霊をかけてその地域に関わるのでなければ、地域について何か言ってほしくない、よそのものにいろいろと言われたくない」という考えにつながるのであれば、地域とゆるくつながることができなくなってしまうです。さらに、多くの自治体が競って移住施策を打ち出したとしても、限られたバイの奪い合いとなり、*₂ゼロサムゲームとしての限界があることも事実です。

また交流人口ですが、これも観光その他のイベントで、地域が繁栄することは素晴らしいことです。また観光をきっかけにその地域に関心を持ち、定住・移住することもあるでしょう。ただ、関わり方というのは、やはり観光だけではないはず*₃です。ミレニアル世代などの若者世代では、社会貢献の意識が高まっており、地域へも何らかの貢献をしてみたいとの希望があります。そこで、観光以外の選択肢が望まれるわけです。

このような社会の機運を反映して、総務省の研究会報告書では関係人口という考え方が提唱されました。報告書で関係人口は「長期的な『定住人口』でも短期的な『交流人口』でもない、地域や地域の人々と多様に関わる者」と定義されています。そして具体的な関係人口の種類としては、「『近居の者』『遠居の者』『何らかの関わりがある者』『風の人』」が例示されています。

「風の人」とは、趣のある表現ですね。「風の人」とは、ローカルジャーナリストの田中輝美氏が提唱した言葉であるそうです。田中氏は著書で関係人口の関わり方の具体例として、「特産品購入」「寄付（ふるさと納税など）」「頻繁な訪問」「ボランティア活動」「二地域居住」を挙げています。「風の人」とは、ここで示された多様な関わり方を自由に選択し、定住・移住でもなく、交流・観光でもなく、地域の仲間として貢献したいという気持ちに沿って行動している人を指すようです。

「風の人」という表現がわかりやすいのは、複数の地域に同時に関わることも肯定されるイメージがあるからではないでしょうか。従来は、複数の地域に同時に関わることに否定的なイメージがあったかもしれませんが、「全身全霊をあげて、ひとつの地域に尽くすのでなければ、意味はない。そうでなければ、いい加減だ」という批判です。しかし「風の人」として、複数の地域のファンになり、複数の地域に貢献しても、本来、何ら問題はないはず*₄です。これは、社員の兼業・副業を嫌い、1つの企業だけに忠誠を尽くすべきとする論理と似ています。

また「風の人」とっては定住・移住が最終ゴールではない、というイメージもわかりやすく伝わります。多様な選択肢があってもいいけれど、やはり最終的には必ず定住・移住してほしい、となれば、真の意味で選択肢が増えたとはいえないでしょう。定住・移住をゴールとせず、「風の人」としてさまざまな地域を漂い、それぞれに貢献していく。それでも意味があるんだよ、と肯定されれば、安心して、ゆるく地域とつながることができそうです。

注*1 オルデンバーグ Oidenburg, R. (1988) The great good place. New York: Marlowe & Company (忠平美

幸訳(2013)『サードプレイス』みすず書房。

注*2 ゼロサムゲーム 参加者の得点(利益)と失点(損失)の総和(サム)が「0」(ゼロ)になるゲーム。

注*3 ミレニアル世代 西暦2000年初頭に成年を迎えた世代。

(石山恒貴氏『地球とゆるくつながろう サードプレイスと関係人口の時代』により、一部を改変した)